

第13. 近代と変体仮名について

はしぐち 橋口
こうのすけ 侯之介



大衆本市場の瓦解と変質

明治の過渡期の本は江戸時代以前の仮名をまだ使っていた。

前島密の漢字廃止論では「ひらかな 五十じ さへ あれば よろづ の こと に すこし も さしつかへ なき こと」と仮名だけで日本語を表現すべしといった。

西周はローマ字化すべきだといったし、大正時代以降、ヨーロッパで唱えられていたエスペラント語を常用すべしという者もいた。第二次大戦後しばらく経つまで、こういう論議はくすぶっていた。一字一音とし、簡易な文法にするなど日本人にも向いていたが、広がりはなかった。

結局明治33年の文部省「小学校令施行規則」は、使用すべき漢字1200字をかかげ、尋常小学校ではその中から選ぶように定めた（現在は常用漢字約2000字）。この規則と言文一致運動によって、漢字廃止やローマ字論は下火になる。

小学校令施行規則

明治33年の「小学校令施行規則」では漢字の制限と、仮名を一字一音にした。それが現行の平仮名、片仮名である。その結果、それ以外の字体は「変体仮名」ということになって教育現場から追放された。

仮名の歴史

平安時代初期、それまで漢字で表紙してきた「万葉仮名」にかわって平仮名・片仮名が生まれた。平仮名は和歌を詠むため、片仮名は漢文を訓読するために用いられた。そのため、片仮名は楷書体の漢字の部分をとる方法でつくられた。平仮名は草書のくずし字からきた。

片仮名は現代のものとそう変わらない字体だが、平仮名は同音でもいくつかのバリエーションができた。平仮名を書くときは、その美的センスが大事だったので、書き分けをしたのだ。

以来、中世・近世はもとより、明治の初めまで「変体仮名」は使われた。現代では読めない人が大半だが、江戸の寺子屋では子供でも読めたのだから、今でも簡単な訓練ですぐに覚えられる。これが読めると、古典の原本を理解することができ、楽しみも増える。

誠心堂書店では、変体仮名初心者のためにネット上で検索できるシステムを開発中である。

<http://www.book-seishindo.jp/kana>

変体仮名を調べる 歴史的仮名書体を探す



新・起筆から変体仮名を探す 3

1. 点を打って始まる	2. 左払い(右よりの横)で始まる	3. 横棒から始まる	4. 縦棒から始まる	5. 丸く書く
い	ノ	一	丨	ㇿ
点から点へ 点から左払い 点から横棒 点から縦の棒	左払いから右払い 左払いから左払い 左払いから横棒 左払いから縦の棒	横棒から点へ 横棒から左払い 横棒から横棒 横棒から縦の棒	縦の棒から点へ 縦の棒から左払い 縦棒から右払い 縦棒から横棒 縦棒、縦棒	

3. 横に棒を書いて始まる

それぞれの文字をクリックすると変体仮名の表を表示します

横棒から点へ	一
忌 あ歴	忌 あ歴
ア む無	ア よ世

「ひらがな」は現代では一音一字ですが、平安時代以来明治の初めまで、さまざまな種類の字体が用いられてきました。この歴史的書体である「変体仮名」を知らなければ、江戸時代以前の和本や文書を読むことも調査することもできません。本サイトは変体仮名を調べやすいように工夫してみました。まだ未完のテスト版です。ご意見を下されば幸いです。

主な かな表

あ	い	う	え	お
あ 阿	い 伊	う 宇	え 衣	お 於
か	き	く	け	こ
か 加	き 幾	く 久	け 計	こ 己
さ	し	す	せ	そ
さ 佐	し 之	す 春	せ 世	そ 曾
た	ち	つ	て	と
た 多	ち 知	つ 川	て 天	と 止
な	に	ぬ	ね	の
な 奈	に 爾	ぬ 奴	ね 祢	の 乃

は	ひ	ふ	へ	ほ
は 波	ひ 比	ふ 不	へ 部	ほ 保
ま	み	む	め	も
ま 末	み 美	む 武	め 女	も 毛
や		ゆ		よ
や 也		ゆ 由		よ 与
ら	り	る	れ	ろ
ら 良	り 利	る 留	れ 禮	ろ 呂
わ	み	ゑ	を	ん
わ 和	み 為	ゑ 惠	を 遠	ん 尤



わ	和	わ	わ	わ	わ	わ
王	王	王	王	王	王	王

た	太	た	太	た	太
多	多	多	多	多	多

か	加	か	か	か
可	可	可	可	可

し	之	し	し	し	し
志	志	志	志	志	志

み	美	み	み	み
三	三	三	三	三
見	見	見	見	見

す	寸	寸	寸	寸	寸
春	春	春	春	春	春
須	須	須	須	須	須

は	波	波	波	波
者	者	者	者	者
磐	磐	磐	磐	磐

に	仁	仁	仁	仁
爾	爾	爾	爾	爾
丹	丹	丹	丹	丹
耳	耳	耳	耳	耳



住の江の きしによる波 よるさへや
夢のかよひぢ人めよくらん
藤原敏行



こころあてに をらばやおらん 初霜の
おきまどわせる しらぎくのはな
凡河内躬恒

